

V 4

保育者養成における野外活動の意義（Ⅰ）

冬期キャンプの導入経緯とその実践内容

○北原隆史（東京教育専門学校） 嶋原晶子（東京教育専門学校） 峯 克政（東京家政大学大学院）

Ⅰ. はじめに

最近の様々な教育場面、社会場面での問題を背景にして心の教育の充実が課題となってきた。以前より、それらの課題に対して野外活動の果たす可能性については多くの立場から検討されてきているが、中央教育審議会中間報告「幼児期からの心の教育の在り方について」には「野外で遊ぶ楽しさを子ども達が実感できるような積極的な環境づくり」や「自然の中での遊びを通じて、驚きや感動を体験し豊かな感性をはぐくむことの必要性」が強調されている。また、「幼稚園・保育園においては、自然体験や社会体験の機会を充実させ、幼児の心に響く豊かな活動を展開し、幼児が自分の力でやり遂げる喜びや充実感を味わうとともに、自立心や責任感がはぐくまれるような体験を得られるようにする」体験活動を積極的に取り得ることを勧め、幼稚園・保育所の役割の重要性が見直されている。「子ども達に感動や驚きを与え、豊かな感性をはぐくみ、自主性や協調性、忍耐力などを培う」ため、そこに関わる保育者にもそのような資質が求められてくるであろうことは容易に理解できる。保母養成のあり方研究会は「多様な保育ニーズに対応できる保母養成のあり方について・Ⅱ」（1997）で保育園園長が保母養成校に求めるものの実態調査を行っている。そこで、保母職を目指す学生に習得させるべきこととして、保育者として直接保育実践に関わって必要とされる事項として回答率の高かったものは「子どもの喜びや悲しみ、驚きなどを自らのものとし、子どもと感動を共にすることができる」（83.4%）「人との関わりを大切に、議論は十分にしながら最後は協調・協力することができる」（77.0%）であったと報告している。保育者養成カリキュラム改訂にあたり、これら社会的な養成校への動向を考慮しつつ、保育者養成における野外活動の意義を改めて考察することを目的とする。

Ⅱ. 野外活動のねらい

さまざまな直接体験、いろいろな人との出会い、自分の可能性の気付き等を通して、新たな自分への課題を見つけ、保育者としての役割の重要性を再認識することを大きなねらいとしている。特に、学生自身の“感じる心”＝感性に働きかけられるプログラムとなるよう配慮している。

保育者養成の専門学校としてのキャンプ実習、スキー

教室であるからこそ、まず保育者となる学生自身が体験者となり、学生自身が感動できる体験となるようにしたい。その感動を持って是非子ども達と関わって欲しい。自然の素晴らしさ、恐ろしさ、大切さ、人間関係・他者理解の大切さ、難しさ、自分自身の弱さ、可能性など、すべて保育者自身が体験し感動した経験が無ければ、それらを子ども達と一緒に感じて感じようとする姿勢は生まれにくいように思える。

また、保育者としてその重要な資質は、多くの直接体験に基づく豊かな感性であることを志向するとともに、多くの講師、仲間との「出会い」を通しての人間関係の広がりをねらいとする。個人で多くの才能に秀でていることは、それはそれで素晴らしいことであるには違いないが、多くの協力者を得ることはそれ以上に大切な保育者としての資質であると考えられる。何かに取り組みたいと考えるとき、その相談にのってくれる人、協力してくれる人の存在は、決して一朝一夕にできるものではない。多くの講師、仲間との共有体験は協力者を広げる大きなチャンスであると思われる。

さらに、自然・スポーツへ障害者が如何にアプローチしているか海外国内の動向を知るとともに、実際に障害者との自然・スポーツでのふれあいを通して障害者への理解を深める。これらの経験は統合保育に対する積極的な考え方にも影響を与える可能性も示唆されている。

Ⅲ. 講師と学生と活動内容の関係

学生は個人として尊重して接し、学生とスタッフ・講師とはキャンプネームで呼び合う対等な人間関係であり、援助者としての役割にとどまらず学生と一緒に創作活動・探索活動等を楽しむことが出来るような雰囲気大切にしたいと考えている。学生達に感じて欲しいというキャンプ・プログラムの目的や趣旨はあっても、その価値観を押し付けるのではなく共に創作活動、探索活動等を楽しみながら、学生自身で感じ取れるような講師・スタッフの援助、配慮が重要となる。ほとんどのプログラムは事前に講師が設定したとしても、そこで展開される野外活動・体験学習は学生の意識や取り組み方しだいでもいかようにも深められるようにしたいと考えている。したがって、講師は必ずしもキャンプ・スキーのスペシャリストである必要はないと思われる。様々な分野で活躍している方々と寝食を共にし多くの活動を共にしながら人と人との出会いが

学生にとって影響が大きい。上記のことを認識し、学生と共にの姿勢を実践できるかどうか重要な資質となると考える。

IV. 導入経緯

特に冬期におけるキャンプを導入したねらいは雪という環境がもつ可能性の大きさである。白い世界から受け取る自然への感動は、自然を感じる、自然からのメッセージを受け取る側のレディネスを育て、学生の感性、創造性に訴えるプログラムを提供しやすいと考えた。冬期の野外活動としてスキー教室は、「滑る」という雪の持つ特性のひとつを活かし、技術の進歩に伴う感動と自然との一体感を得られる素晴らしい野外活動として、現在も継続している。しかし、もっと純粋に雪の持つ様々な特性を活かした活動、自然、仲間、自分を見つめなおすきっかけとなる活動として冬期キャンプを導入した。また導入にあたり、成城大学教授で東京教育専門学校の母体である目白幼稚園で長年運動を指導して頂いた故両角亮弘先生の雪の生活実践の楽しさ、貴重さといったご助言にも大きく影響された。

場所は新潟県妙高高原にあるYMCA妙高高原ロッジに宿泊し近辺の自然環境の中で行っている。選択授業（体験学習）の一環として希望者で行っているが初回（平成4年度）の参加学生数は18名で2泊3日のプログラムで行った。平成7年度には選択授業名はレクリエーション理論・実技に変更された。この年度からよりゆとりを持って活動できるよう日程は3泊4日になった。その時の参加学生数は70名である。平成9年度の参加学生数は68名であった。

V. 活動内容

雪洞作り

2～4m程積もった雪をスコップ等で掘り、雪の部屋を創る。10～15名が入れる空間を創るが、掘りすすめるうちにテーブル、椅子、燭台、冷蔵庫なども創られイメージが広がる活動である。雪洞の外部、掘り出された雪も造形的な活動に結びつきやすい。様々な雪像、そりコース、階段、門柱など各グループごとに工夫し取り組む。

スノーパーティー

雪洞作りのまとめとして、自分達が創った雪の部屋でスノーパーティーを行う。3日間の活動を振り返り、協力することの大切さ、その結果として創られたものから改めてグループの可能性の大きさ、素晴らしさが実感できると思われる。そして、その一員としての自分も改めて見つめる機会にしたいと考えている。

蕎麦作り

野外活動が自然との様々な触れ合いの中で多くの出会いを提供するものであるとするならば、蕎麦作りも多くの出会いを提供してくれる貴重な野外活動と捉えている。そばと水との微妙な出会い。それはその時の自然状況（天候、湿度）により微妙に調節しなければならない。それは、そば粉と手のひらの微妙な感覚により決められる。蕎麦作りを指導して頂く現地の方の研ぎすまされた自然への感覚に驚き感動させられる。そして自らの手で造られた蕎麦を食べる時の感動と喜び、まさに自然を食べているという感覚にさせられる。

スノーハイキング（ネイチャースキー）

クロスカントリースキー、桃井氏が考案したネイチャースキーなどを使用しロッジ近辺の森に昼食を持参しハイキングする。おおよその場所と時間は指定されるが、グループで自由に森の中を散策する。自然の中で自分なりに自由に自然とのいろいろな出会いを楽しみながら、自分なりに感じたり、発見したものを大切に、その思いをグループで共有できる機会を持つ。ここでは特に、自然の中で自分を見つめる機会として位置付けられる。

イブニングレクチャー

冬期における視覚障害者スポーツ・レクリエーションの動向、ネイチャースキーの理論的背景、ファインダーからみた妙高高原などをテーマにそれぞれ日中共に活動をしている講師から講義を受ける。夕食後90分位の時間で行うが学生は集中して興味深く受講している。

手作りアイス

学生から提案があり企画されたプログラムで、冬の自然の中で遊びながら手作りのアイスを楽しむ。お茶の缶などの容器に材料を入れ、ソリに取り付けソリ遊びを行う。その間に雪で冷やされアイスが出来上がるであろうと仮定して実施したが、結局は冷凍庫を使用した。しかし、全員で楽しめるようにソリ遊びを学生が考え、進行し全員で楽しめる活動であった。また、作られたアイスはスノーパーティーで出され、自分達で作ったと満足感と楽しさを振り返ることが出来た。

VII. まとめ

これらの野外活動がどのように学生に影響を及ぼしているか、さらに卒業後の保育活動への影響など分析検討し、保育者養成校での野外活動の在り方についてさらに、考察していきたい。